

# 劉宗周『論語學案』卷一「爲政篇——二」訳注（3）

——晚明期「新陽明学者」の『論語』解釈——

原 信太郎 アレシヤンドレ

本稿は、明代末期の儒者・劉宗周（号は念台、一五八七～一六四五）の『論語』解釈を記した『論語學案』の訳注を試みるものであり、本誌二三号からの連載である。訳注の基本方針や体裁については、前号に掲げた「序言」「凡例」が生きており、そちらを参照されたい。前号では爲政篇全二十四章のうち、第十章までを検討したが、本稿では引き続き、第十二章から第二十一章までを検討範囲とする。

訳注

爲政第二

【為・12】

子曰、君子不器。

僚之丸、<sup>(1)</sup>獲之塗、<sup>(2)</sup>公胥之斷、推而至於堯舜之治天下、皆器也。君子不器、其體天地之大全而一<sup>(4)</sup>以貫之者乎。

(校1) 獲…十卷本「獲」に作る。

(1) 僚之丸 「僚」は春秋時代の楚の勇士、姓は熊、字は宜僚のこと。市の南に住んでいたことから市南と号した。「丸」はお手玉。楚の白公勝が同じく楚の令尹子西を殺害する謀略に左袒するよう迫った際、宜僚は玉遊びに興じて誘いに乗らなかつた故事を踏まえる。『莊子』雜篇・徐無鬼に「市南宜僚弄丸而兩家之難解、孫叔敖甘寢秉羽而郢人投兵」とあり、成玄英疏は「楚白公勝欲因作亂、將殺令尹子西。司馬子綦言熊宜勇士也、若得、敵五百人、遂遣使屈之。宜僚正上下弄丸而戲、不與使者言。使因以劍乘之、宜僚曾不驚懼、既不從命、亦不言佗。白公不得宜僚、反事不成。故曰兩家難解」(『莊子集釋』卷八中・徐無鬼二十四、中華書局、八四二頁)と説明する。

(2) 獲之塗 古代の壁塗り名人の名。転じて壁塗り職人をも指す。『漢書』卷八十七下・揚雄伝に「獲人亡、則匠石輟斤而不敢妄斲」とあり、その注に「服虔曰、獲、古之善塗墜者也。施廣領大袖以仰塗、而領袖不汗。有小飛泥誤著其鼻、因令匠石揮斤而斲、知匠石之善斲、故敢使之也。師古曰、墜即今之仰泥也。獲、扞拭也。故謂塗者爲獲人。獲音乃高反、又音乃回反。今書本獲字有作郢者、流俗改之。墜音許既反」

(中華書局、三五七八頁)とある。

(3) 公胥之斲 未詳。

(4) 一以貫之 『論語』里仁「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」。

子曰く、君子は器ならず、と。

宜僚が争いごとを回避した丸(お手玉)、夔の壁塗り、公胥の伐採から、堯舜が天下を統治したことまで、みな「器」(二つことに限定されたモノや技能)である。「君子は器ならず」とは、君子とは天地間のあらゆる物事や働きを一身に体しながらも、『論語』里仁篇にいう)「一以て之を貫く」ということであろうか。

【為・13】

子貢問君子。子曰、先行其言、而後從之。

人未有不先行其言而後從之者。雖君子亦然。但君子全是一副躬行精神、其不得已而有言、亦以言其所行而絶不操有餘之勢、一似倒用者。然非必言之於既行之後也。蓋君子慥慥之學如此。

(校1) 必：十卷本「以」に作る。

(1) 言之於既行之後也 『論語大全』卷二・為政第二・当該章注に引かれる宋の周孚先の説。「周氏曰〔周氏、名孚先、字伯忱、毗陵人〕先行其言者、行之於未言之前而後從之者。言之於既行之後〔問、先行其言而後從之、苟能行矣、何事於言。朱子曰、若道只要自家行得説、都不得、亦不是道理。聖人只説敏於事而謹於言。敏於行而訥於言。言顧行、行顧言。何嘗教人不言〕」

子貢君子を問ふ。子曰く、先ず其の言を行ひて、而る後に之に従ふ、と。

人たるもの「先ず其の言を行ひて、而る後に之に従ふ」のようにしないものはない。それは君子とて同じだ。ただ君子はまるごと実践精神の塊のような存在であるから、やむを得ず発言することがあっても、実践内容の話をするのであって、勢いに任せてお喋りして、精力を誤り用いることがないのである。ただ、「すでに行つてから、そのことについて語る」必要があるという訳ではない。要するに、君子はこのように孜孜として学問に励むということだ。

【為・14】

子曰、君子周而不比、小人比而不周。

周與比、涉世之道不甚相遠。但出於君子則爲周、全是元氣周流。與人爲善之心、雖似同而非同。出於小人則爲比、全是私情狎比、與人濟惡之心、雖似和而非和。和則和於君子、未嘗不和於小人。同則同於小人、必異於君子。心術一分、而世道治亂之機、恒必由之。可懼也夫。

(校1) 比而不周……十卷本、この下に割注「比、必二反。」が入る。(校2) 周與比……十卷本「和與周」に作る。(校3) 周……十卷本「和」に作る。(校4) 爲比……十卷本「爲同」に作る。

(1) 與人爲善之心 『孟子』公孫丑上「孟子曰、子路、人告之以有過則喜。禹聞善言則拜。大舜有大焉、善與人同、舍己從人、樂取於人以爲善。自耕稼陶漁以至爲帝、無非取於人者。取諸人以爲善、是與人爲善者也。故君子莫大乎與人爲善」。

(2) 同 和 『論語』子路「子曰、君子和而不同、小人同而不和」。

(3) 狎比 親しむ。なれなれしくする。

子曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず、と。

「周」と「比」とは、処世の道としてそれほど懸隔のあるものではない。ただ、君子が行えば「周」となり、すべてが元氣（根源的な氣）の周流である。人とともに善を行おうとの心映えは一見「同」に似て

いるが、そうではない。小人が行えば「比」となり、すべてが私情による馴れ合いである。人とともに悪をなそうとする心映えは一見「和」に似ているが、違うものである。「和」の場合、君子と「和」するものであるが、小人と「和」しないわけではない。「同」の場合、小人と「同」するものであるが、必ず君子を「異」とするものである。心持ちの相違は、そのまま社会の治乱の分岐点でもあるのだ。よくよく恐れ慎むべきことだ。

【為・15】

子曰、學而不思則罔、思而不學則殆。

專言學、則學必兼思。兼言思、則學只是學。學一途、而思乃求以自得於心者。蓋耳目心思、（校<sup>1</sup>）合并而用之者也。偏廢則兩妨。學非其學、學必罔、謂無得於心、狗迹而失之譌舛。（校<sup>2</sup>）思非其思、思必殆。謂未據其實、信心而失之孤危。其病道均也。而殆尤甚。他日又曰、以思、無益。不如學也。蓋罔則爲俗學耳。殆則必爲異端。

（校1）合并…十卷本「合併」に作る。（校2）譌舛…十卷本「訛舛」に作る。

（1）『論語』衛靈公篇「子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢以思、無益、不如學也」。

子曰く、學びて思はざれば則ち罔く、思ひて學ばざれば則ち殆し、と。

「学」とのみ言えば、「思」はそのなかに含まれている。「学」と並べて「思」を別言すれば、「学」はたんに「学」だ。「学」のなかには「学」「思」の双方が一体化しているが、「思」は心に自得しようと求めることだ。そもそも、耳目の働きと思考とは一体となつて働くものである。どちらかを止めれば双方に差し支えが出る。「学」が、あるべきあり方を失えば、その「学」は必ずや「罔く」なる。それは心に会得することなく、あたら物事の外面を追いかけて間違いを犯すことをいう。「思」があるべきあり方を失えば、その「思」は必ずや「殆く」なる。それは確かなものに基づかず、自分の心ばかりを信じて孤高に陥つてしまふことをいう。両者とも道をそこなうことは等しいが、「殆し」がとりわけひどい。孔子は『論語』衛靈公にあるように「後日重ねて「以て思ふも益無し。学ぶに如かざるなり」と言った。思うに、「罔し」であれば世俗的な学問になるだけだが、「殆し」であれば必ずや異端に陥つてしまう。

【為・16】

子曰、攻乎異端、斯害也已。

凡出乎中庸之道者即爲異端。異端者、於大道中矯之以爲異、而其端緒可指也。如楊之義、墨之仁、佛老之

性命、皆竊吾道之一端而矯(校2)以爲異者。至於佛氏作、而其說恍惚杳渺、漫無端緒可尋矣。故害道滋甚。異端(校3)之異道、先中於人心、新奇之說一倡、能令天下羣起而攻之、而弗且決裂而不可救、至於生民糜爛、無父無君。噫(校6)、此孔氏之所以斷斷洙泗也與。(校7)○瑒曰、端字從未有如此闡發者。(校8)

(校1) 楊之義、墨之仁…十卷本「楊之仁、墨之義」に作る。(校2) 矯以爲異…十卷本「矯之爲異」に作る。(校3) 異道…十卷本「害道」に作る。(校4) 令天下…十卷本「使天下」に作る。(校5) 弗…十卷本「禍」に作る。(校6) 噫…十卷本はこの字を欠く。(校7) 孔氏…十卷本「孔門」に作る。(校8) 與…十卷本はこの字を欠く。(校9) 瑒曰、端、闡發者…十卷本は圈点から文末までの12字を欠く。

(1) 楊之義、墨之仁 楊朱の爲我説を儒家の義に、墨子の兼愛説を同じく仁に似るとする言説は、すでに『程氏遺書』卷十三(明道先生語三)に「楊墨之害、甚於申韓。佛老(一無老字)之害、甚於楊墨。楊氏爲我、疑於仁。墨氏兼愛、疑於義。申韓則淺陋易見。故孟子只闢楊墨、爲其惑世之甚也。佛老(一作氏字)其言近理、又非楊墨之比。此所以害尤甚。楊墨之害、亦經孟子闢之。所以廓如也」(中華書局、一三八頁)と見える。

(2) 斷斷洙泗 『史記』卷三十三・魯周公世家第三「太史公曰、余聞孔子稱曰、甚矣、魯道之衰也。洙泗之間、斷斷如也」。裴駟『史記集解』所引の徐広の注「漢書地理志云、魯濱洙泗之間、其民涉渡、幼者扶老者而代其任、俗既薄、長者不自安、與幼者相讓。故曰、斷斷如也。斷、魚斤反。東州語也。蓋幼者患



苦長者、長者忿愧自守。故斷斷爭辭、所以爲道衰也」。

子曰く、異端を攻むるは、斯れ害のみ、と。

およそ中庸から逸脱したものは、異端となる。異端というのは、大道のなかにあつて、それを歪曲して異なつたものとしたのであり、それとして示すことのできる端緒がある。例えば楊朱の義に近似した爲我説、墨子の仁に近似した兼愛説、仏老の性命説は、すべてわが儒教の一端を歪曲して異なつたものとしたのである。仏教が勃興すると、その説はほんやりとして奥深く、捉えどころのある端緒など存在しない。このため、道をそこなうことますます甚だしい。異端が道をそこなうやり方は、まず人心を迎るのである。目新しい説を唱えて、天下の人々みなにそれを修めさせるのだ。その災禍たるや、救いようのないほどに社会が破綻し、民衆が墮落して父や君主をないがしろにするまでに至ろうとしている。ああ、これが孔子が「甚だしきかな、魯道の衰へたるや。洙泗の間、斷斷如たり」(魯において聖賢の道の衰亡ぶりは著しい老人と若者とがそここで言い争っている)と嘆いた所以である。

【董場「端」の語について、その意味をこんなにもはっきり説いたものはない。】

【為・17】

子曰、由、誨女知之乎。知之爲知之、不知爲不知。是知也。

子路力行可畏、未必心地劃然。緣他氣質兼人<sup>(1)</sup>、往往失之徑行直遂。故心易受蔽。心有所蔽、則誤<sup>(2)</sup>不知以為知者有之。此所謂不知而作也。故聖人頂門一針<sup>(3)</sup>、告以求知之道。知不求之外、而即求之在我。為知為不知、何人不分曉。正恐自謂分曉、不免種種是錯、認得不真。須是子細<sup>(4)</sup>查考來。所知者既不妨自信、所不知者尤不妨自疑、則信所信、知也。信所疑、亦知也。是知也。而非以無不知之為知也。此等學問、只虚心反觀、便自得之。但胸中習見積久、容易沙汰不盡、不免時啟時閉、終身擾擾。學者須從格物致知之功始得。○良知在我、無所不知。但為私意錮住、則有時而昏。眼中纔中些子塵<sup>(5)</sup>、便全體昏黑、更無通明處。故知則全體皆知、不知則全體皆不知、更無半明半暗分數。但此蔽有去來、則有時而知、有時而不知耳。夫既有時而知、有時而不知、則并非其知而非。人能知己之不知、正是無所不知的本體呈露時、如金針一撥<sup>(6)</sup>、宿障全消。○語云、無行所疑最為難事、是子路一生病痛。

(校1) 是知也：十卷本はこの下に割注「女、音汝。」が入る。(校2) 誤：十卷本「認」に作る。(校3) 頂門一針：十卷本「頂門一鍼」に作る。(校4) 子細：十卷本「仔細」に作る。(校5) 容易：十卷本「倘或」に作る。(校6) 纔中：十卷本はこの二字を欠く。(校7) 金針：十卷本「金鍼」に作る。

(1) 兼人 『論語』先進篇「子曰、求也退、故進之。由也兼人、故退之。」「兼人」は『論語大全』卷二・為政第二、当該章注に「兼人、謂勝人也」とあり、『論語學案』【先・20】に「子路力行可畏。只是粗、

兼人處全是氣魄用事。如人下食貪多、便嚼不化、胡亂嚥下」と説明する。

(2) 不知而作之 『論語』述而篇「子曰。蓋有不知而作之者、我無是也。多聞擇其善者而從之。多見而識之、知之次也」。

(3) 金針一撥、宿障全消 北宋の徽宗の妃であった顯仁皇后が、針によって眼病を治療した故事を踏まえた言い方。『朝野遺記』(『說郛』第四九)「和議成、顯仁后(徽宗后韋氏)將還、欽廟挽其輪而曰、蹕之。第與吾南歸。但得爲太一宮主足矣。他無望於九哥也(高宗第九)」。后不能卻、爲之誓曰、吾先歸。苟不迎若、有誓吾目。乃升車既至、則是間所見大異、不久后失明。募醫療者莫能奏效。有道士應募、中貴導之入宮、金鍼一撥、左翳脫然而復明。后大喜曰、吾目久盲、得師重朗。更煩終始其右、報當不貲。道士笑曰、后以一目視足矣。以一目存誓、可也。后惕然起拜曰、吾師聖人也。知吾之隱」。

子曰く、由、女に之を知ることおしを誨へんか。之を知るを之を知ると爲し、知らざるを知らずと爲す。是れ知れるなり、と。

子路の力行ぶりは畏敬すべきものがあるが、その胸中は必ずしもさっぱりしたものではない。人に勝とうとする質たちであるため、直情径行の過ちを犯しがちなのである。この故にその心は(私欲に)覆われやすい。心が覆われると、まま、知らないものを知っていると誤解する。これがいわゆる「知らずして作す」ことである。そこで聖人は頂門に一針を下し、知を求めぬ道筋を告げたのである。知は外に求めるのでな

く、自分自身に求めるものなのだ。知っているのか知らないのか、分明でない者はいないであろう。戒めるべきは、自分では分明であると思っても間違いだらけで、はっきりと認識していないことである。この点、詳らかに検証を加えなければならぬ。その結果、知っていることについては信じればよいし、知らないことは疑えばよい。信じたことをそのまま信じるのが知であれば、疑わしいことをそのまま疑うのも知である。これこそが「是れ知れるなり」である。何でも知っていることが知なのではない。この学問は虚心に省みれば自ずと腑に落ちるものだ。ただ、今まで身につけてきた物の見方が強固に習慣化され、容易に一掃することができなければ、明らかになったり暗くなったりの繰り返しで、死ぬまで忙しい仕儀となる。学ぶ者はまず格物致知の修養から始めねばならない。

良知は自分自身にあるものであり、知らないものはない。ただ私意によって閉ざされると、暗んでしまうことがある。目のなかに僅かでも塵が入ると全体が暗くなり、視界がまったく閉ざされてしまうだろう。かように、いったん知ることができれば一切を知ることができる。知ることがなければ全て知ることがない。半分が明らかで半分が暗いといった、割合の問題ではないのである。ただ、時によって覆われたり覆われなかったりがあるために、知る時があったりなかったりすることだ。だが、あるときは知り、あるときは知らないというようでは、その知はまったく駄目だ。「針を一刺しすれば、たちまち従来の眼病が癒える」という例えの通り、人が自身の不知を自覚した時こそ、すべてを知る良知の本体が発露する時なのである。

古語にいう、「確信を持ってないことを行わないこと、これがとりわけ難しい」と。これこそ子路の一生の

欠点だ。

【為・18】

子張學干祿。子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔。言寡尤、行寡悔、祿在其中矣。

子張學干祿、蓋病在誇多鬪靡、炫耀聞譽、有希世之心、一似爲干祿而學者然。故夫子亟以爲己之學挽之多聞多見、總以爲反約之地。聞見雖多、試措之於言行、往往疑者多而信者寡。即言行其所信而猶不敢肆然、而出之唯恐多言多召尤、多動多宿悔也。以是爲言行縱不能不抵於尤悔而亦云寡矣。不曰無之而曰寡、亦據其慎言慎行之心則然。而要之學焉而後知不足。則寡尤寡悔、亦非大賢以上不能者。此之爲祿在其中。所謂身安爲貴、道充爲富、不待求而自在者也。學者誠知寡尤寡悔之即祿、而後可以言學。充得盡、邈世不見知而不悔、唯聖者能之。以爲學焉而祿自至者、此又深於學干祿者也。○言行分慎敏兩法。此皆言慎者。敏行者之精神、政自戰兢惕厲中來也。○聞屬言、凡所聞者皆言也。見屬行、凡所見者皆行也。

(校1) 祿在其中矣…十卷本はこの下に割注「行寡之行、去聲。」が入る。(校2) 猶…十卷本「從」に作る。(校3) 不抵…十卷本「盡免」に作る。(校4) 此之爲祿在其中…十卷本「此之謂祿在其中」に作る。(校5) 自在者…十卷本「自得者」に作る。(校6) 寡尤寡悔…十卷本「寡尤悔」に作る。(校7) 自至者

：十卷本「自在者」に作る。(校8) 敏行者之精神：十卷本は「者」を欠く。(校9) 政：十卷本「正」に作る。

(1) 誇多鬬靡 唐・韓愈『昌黎先生集』卷二十「送陳秀才彤序」「讀書以爲學、續言以爲文、非以誇多而鬬靡也。蓋學所以爲道、文所以爲理耳。苟行事得其宜、出言適其要、雖不吾面、吾將信其富於文學也」(『韓愈文集彙校箋注』第三冊、中華書局、一一〇九頁)。

(2) 多言多召尤、多動多宿悔也 劉宗周は母・章氏から繰り返し「多言」「多動」を戒められていた。

『劉宗周全集』第四冊「顯考誥贈通議大夫順天府府尹秦臺府君暨顯妣誥贈淑人貞節章太淑人行狀」「或見宗周氣宇輕浮、則時時勅曰、戒之戒之。無多言。多言敗德。無多動。多動敗事」(二五三頁)。

(3) 身安爲貴、道充爲富 『通書』富貴第三十三「君子以道充爲貴、身安爲富。故常泰無不足。而銖視軒冕、塵視金玉。其重無加焉爾」。

(4) 遯世不見、唯聖者能之 『中庸』「子曰、素隱行怪、後世有述焉。吾弗爲之矣。君子遵道而行、半途而廢。吾弗能已矣。君子依乎中庸、遯世不見知而不悔、唯聖者能之。」

(5) 言行分慎敏兩法 『論語』學而「子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已矣」、同里仁「子曰、君子欲訥於言、而敏於行」。

(6) 戰兢惕厲 劉宗周は朱熹の語と認識しているようである。『劉宗周全集』第三冊「復曹遠思進士」  
「苟學不聞道、而徒以一切倖倖者當之、即幸而得之、亦正一指之伎倆、不足爲賢者道也。晦庵先生曰、眞

正英雄、每從戰兢惕厲中來。請爲足下誦之」(三六一二頁)。該語はまた『孟子集注大全』卷八・離婁章句下「孟子曰人之所以異於禽獸者幾希」章注に「人物之生、同得天地之理以爲性、同得天地之氣以爲形。其不同者、獨人於其間得形氣之正、而能有以全其性、爲少異耳。雖曰少異、然人物之所以分實在於此。衆人不知此而去之、則名雖爲人、而實無以異於禽獸。君子知此而存之、是以戰兢惕(他歴反)厲、而卒能有以全其所受之正也」とある。

子張祿を干めんことを學ぶ。子曰く、多く聞きて疑はしきを闕き、慎みて其の餘を言へば、則ち尤寡し。多く見て殆きを闕き、慎みて其の餘を行へば、則ち悔い寡し。言、尤寡く、行、悔い寡ければ、祿其中に在り、と。

「子張 祿を干めんことを學ぶ」というのは、子張に、知識の豊富さを鼻にかけて文辭の派手さを競い、名声を鳴り響かせて世に迎合しようという心があつて、まるで俸祿にありつくために学んでいるような態度があるところに欠点があるのである。故に孔子は懇切に「己の為にする」(『論語』憲問篇)学を提示し、雑多な知識をそこに収斂させようとするのである。知識はいくら多くても、いざそれを実践の場で活用しようとする時、往々にして疑わしいものが多く、信じるに足るものは少ないものだ。信じるに足るものと言つたり行つたりすることすら細心の注意を払い、余計な話しをしてまた一つ恨みを買わないか、余計な

ことをやってまた一つ後悔を増やさないか、恐れるのである。このように用心して言い、かつ行つたとしても、やはり恨みや後悔から免れることはできない。「無し」と言わず「寡し」と言うのは、言を慎み、行いを慎む心持ちに着目して、かく言つたのである。しかし結局のところ、学問をして初めて自らの不足に気づくものなのだ。とすると、「尤寡し」「悔い寡し」といったことは賢人以上でないとできないものなのだ。これを「祿 其の中に在り」という。(『通書』に) 所謂「道が充実しているのを貴いとし、身の安らかなるを富とする」という道理で、外に求めなくとも自身のなかにもと備わっているのである。学ぶ者は「尤寡し」「悔い寡し」が俸祿そのものであることを真に領解できてこそ、始めて学問を語る資格があるのである。これをさらに充実し尽くせば、(『中庸』にいう)「世を遯れて知られざるも悔いざるは、唯だ聖者のみ之を能くす」の境地となる。学問に勤めていれば俸祿など自ずとやってくるというのは、「祿を干めんことを學ぶ」よりいっそう深遠な境地だ。

(『論語』学而に)「言に慎む」、(同じく里仁に)「行ひに敏」とあるように、言と行は各々異なった法によって推進されるものである。しかしここでは言行の双方についてともに「慎む」と言われている。それは「行ひに敏」なる者の実質は、まさに懼れ慎むところから来ているからである。

(『論語』該章に)「聞く」が「言ふ」にかかっているのは、耳で聞くものは言だからである。「見る」が「行ふ」にかかっているのは、目で見るものは行だからである。



哀公問曰、何爲則民服。孔子對曰、舉直錯諸枉則民服。舉枉錯諸直則民不服。

人主以一身託天下臣民之上、未可以機權控馭之也。(政)奉天道之無私、以順民心而已。舉直錯枉、所以奉天道順民心也。民焉得不服。然君舉錯只一相。相擇羣有司、羣有司擇百執事、百執事下至胥吏之賤、皆以此道遞推之、則天下帖然成大順之治。雖唐虞三代之化不過如此。

(校1) 未可以…十卷本「未有可以」に作る。

哀公問ひて曰く、何を爲せば則ち民服せん、と。孔子對へて曰く、直きを舉げて諸の枉れるを錯けば、則ち民服せん。枉れるを舉げて諸の直きを錯けば則ち民服せず、と。

君主は一身を天下の臣民に委ねており、権力でもってそれを行使するものではない。天道という私心なきものを押し戴いて、民の心に従う存在である。「直きを舉げて枉がれるを錯く」とは、天道を戴き民の心に従う手段である。民が服しないはずがあるうか。しかし、君主が「舉げて錯く」のは宰相の一人のみである。宰相が諸々の官僚を選び、官僚が諸々の官員を選び、そこから順々に降って行って、下つ端の胥吏に及ぶまで、それらすべてを無私の天道によって行っていくのである。そうすれば天下は安定し、大いに調和した治世を実現することができるのである。古の堯舜禹三代の世もこれ以上のものではない。

季康子問、使民敬忠以勸、如之何。子曰、臨之以莊則敬、孝慈則忠、舉善而教不能則勸。

敬忠而且勸、所以責民之道、至矣盡矣。至問所以使之然<sup>(校1)</sup>、則必有端本之術在、而非可徒責之民者。使民敬、吾求吾敬耳。使民忠、吾求吾忠耳。使民勸、吾求吾勸耳。纔上行則下效<sup>(校2)</sup>、捷於影響、是操必得之數者也。故曰、則敬、則忠、則勸。云孝慈則忠、人未有孝而不自致、保赤子而不以誠者、此忠之至也。故以使民忠。蓋既以孝作忠、又以慈感忠也。

(校1) 使之然…十卷本は「然」を欠く。(校2) 下效…十卷本「下倣」に作る。

(1) 捷於影響 影が形の動きにつれて動き、反響が声に応じるよりも速いこと。反応が迅速である喩え。『大学章句大全』「所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍。是君子有絜矩之道也」〔長、上聲。弟、去聲。倍、與背同。絜、胡結反。〕注「老老、所謂老吾老也。…言此三者、上行下效、捷〔疾業反〕於影響。所謂家齊而國治也。」

季康子問ふ、民をして敬忠にして以て勸ましむるには、之を如何せん、と。子曰く、之に臨むに莊を以て

すれば則ち敬す。孝慈なれば則ち忠なり。善を擧げて不能を教ふれば則ち勸む、と。

(民に対し)「敬忠」で、なおかつ「勸む」ことを求めるといふのは、民に対する要求は、至れり尽くせりと言ふべきである。さて、民にかく振る舞わしめるにはいかにすればよいか、というのが質問であるが、それには必ずまず根本を正すという段階があるのであり、民の側のみに一方的に要求するものではないのである。「民をして敬せしむ」には、まず自身が「敬」でなければならぬ。「民をして忠ならしむ」には、まず自身が「忠」でなければならぬ。「民をして勸めしむ」には、まず自身が「勸む」でなければならぬ。お上が何か行えば、すぐに下々がそれにならう、その速度は影が形に従い、反響が声に応じるよりも迅速なものである。かように、上に立つ者は必ずそうなるという必然性を掌握している訳である。この故に「則ち敬」「則ち忠」「則ち勸む」といふのである。「孝慈なれば則ち忠」とは、孝行でありながら真心を尽くさない者はなく、赤子を育てるのに誠を尽くさない者はないからで、これは忠の至りである。故に「民をして忠ならしむ」ことができる。思うに、「孝」によつて民を忠にし、さらに「慈」によつても忠を感応させるといふことである。

【為・21】

或謂孔子曰、子奚不爲政。子曰、書云孝乎。惟孝、友于兄弟、施於有政。是亦爲政。奚其爲爲政。

孝是人最初一念天理流動處。<sup>(校1)</sup> 纔達之第二念便是弟。以孝弟推之、<sup>(1)</sup> 便得刑寡妻、御臣僕之道、自此而九族而百姓而昆蟲草木、皆即此一本而推之裕如者。此孝之所以爲百行之原而萬化之本也。堯舜禹湯文武、嘗以孝治天下矣。<sup>(2)</sup> 故曰、瞽瞍底豫而天下化。知孝之可以使天下化、則知天子有天子之政、諸侯有諸侯之政、大夫有大夫之政、士庶人有士庶人之政、政不同而以言乎不出家而成政於孝則一也。夫子之所以曉或人者至矣。奚其爲爲政、言舍此不爲、將何所爲而爲政乎。○此孔子示人刻刻有見在事業、但問諸身、不必問諸世也。或人言爲政、孔子遽言孝、且只引書詞一二語、加之論斷、而不別增辭說、爲政之在身不在世、已了然矣。至曰孝曰友、總是恰好、講粗不得、講精亦不得也。○道之以德、亦不離孝友。

(校1) 流動處：十卷本は「處」を欠く。(校2) 百行之原：十卷本は「之」を欠く。(校3) 孝之可以使天下化：十卷本「孝之所以治天下」に作る。(校4) 以言：十卷本は「以」を欠く。(校5) 成政於孝則一也：十卷本「成教於孝一也」に作る。(校6) 之：十卷本はこの字を欠く。(校7) 此孔子示人、不離孝友：十卷本は圈点から文末までの90字を欠く。

(1) 刑寡妻 『詩經』大雅・思齊「惠于宗公、神罔時怨、神罔時恫。刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦」、『孟子』梁惠王上「老吾老、以及人之老、幼吾幼、以及人之幼、天下可運於掌。詩云、刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦。言學斯心、加諸彼而已」。

(2) 皆即此一本 『孟子』滕文公上「墨者夷之、因徐辟而求見孟子、孟子曰、吾固願見、今吾尚病、病愈我且往見、夷子不來、他日又求見孟子、孟子曰、吾今則可以見矣、不直則道不見、我且直之、吾聞夷子墨者、墨之治喪也、以薄爲其道也、夷子思以易天下、豈以爲非是而不貴也、然而夷子葬其親厚、則是以所賤事親也、徐子以告夷子、夷子曰、儒者之道、古之人若保赤子、此言何謂也、之則以爲愛無差等、施由親始、徐子以告孟子、孟子曰、夫夷子信以爲人之親其兄之子、爲若親其鄰之赤子乎、彼有取爾也、赤子匍匐將入井、非赤子之罪也、且天之生物也、使之一本、而夷子二本故也、蓋上世嘗有不葬其親者、其親死、則舉而委之於壑、他日過之、狐狸食之、蠅蚋姑嘬之、其類有泚、睨而不視、夫泚也、非爲人泚、中心達於面目、蓋歸反、藁裡而掩之、掩之誠是也、則孝子仁人之掩其親、亦必有道矣、徐子以告夷子、夷子慙然爲閒曰、命之矣」。

(3) 孝治天下 『孝經』孝治章「子曰、昔者、明王之以孝治天下也、不敢遺小國之臣。而況於公侯伯子男乎」。

(4) 瞽瞍底豫而天下化 『孟子』離婁上「孟子曰、天下大悅而將歸己、視天下悅而歸己、猶草芥也、惟舜爲然、不得乎親、不可以爲人、不順乎親、不可以爲子、舜盡事親之道、而瞽瞍底豫而天下化、瞽瞍底豫、而天下之爲父子者定、此之謂大孝」。

(5) 引書詞一二語 孔子が当該章において引く語は、『尚書』周書・君陳篇に「王若曰、君陳、惟爾令德孝恭。惟孝、友于兄弟、克施有政。命汝尹茲東郊。敬哉」とある。

(6) 道之以德 『論語』為政篇「子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮、有

恥且格」。

或ひと孔子に謂ひて曰く、子奚ぞ政を爲さざる、と。子曰く、書に孝を云へるか。惟れ孝、兄弟に友に、有政に施す、と。是れ亦た政を爲すなり。奚んぞ其れ政を爲すことを爲さん、と。

「孝」は最初の一念の、天理が躍動しているところである。一念にわたるとたちまち「弟」となる。「孝」を推し及ぼしていくと、「寡妻に刑し」（自身の妻の手本となり）、臣下を行使する方法が分かり、そこから九族、百姓、昆虫草木に至るまで、みなこの「一本」を推し及ぼしていくのである。これが孝があらゆる徳行の源であり、教化の根本である所以である。堯、舜、禹、湯、文、武といった古代の聖人たちは孝によつて天下を治めた。ゆえに、「瞽瞍 豫ひを底して天下 化す」というのである。「孝」が天下を教化することができることを知れば、天子には天子の政があり、諸侯には諸侯の政があり、大夫には大夫の政があり、士庶人には士庶人の政があり、その政には相違があるが、家を出ないままに政を孝において完成させるといふ点では一つであることが分かる。孔子が「或ひと」を教えたやり方はよく行き届いたものである。「奚ぞ其れ政を爲すことを爲さん」は、これをなさずしてどうやつて政を行うのか、の意である。

この章は孔子が、人には時々刻々と取り組むべき仕事があり、それはわが身に問うべきであつて、外界に問う必要がないことを示したのである。「或るひと」が「政を爲す」と言ったのに、孔子は唐突に「孝」の話をし、『尚書』の語の一つ二つを引いて論断し、それ以上の言辞を加えなかったことから、「政を爲

す」ことはわが身にあり、外界にあるのではないこと明白である。「孝」や「友」はまさしくピタリと言いついており、それ以上簡略な言い方をしてもいけないし、詳細な言い方をしても駄目だ。

〔『論語』為政篇の〕「之を道くに徳を以てす」も「孝」「友」を離れたものではないのだ。

【為・22】

子曰、人而無信、不知其可也。大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。

信是本之真心而見之然諾之際者、是身世作合處(校之)關振子(校一)、猶車之有輓軌然。舉世尚狙詐、人而無信、一味心口相違、千蹊萬徑、用得熟時、若以爲非此不可持身(校之)、不可御世然。豈知有斷斷乎其不可者。不可、只(校五)衡在是非上。而行不行、方格到利害上。人而無信、任大小地位都行不得。即小事尚然、而況大者乎(校七)。

(校1) 其何以行之哉…十卷本はこの下に割注「輓、五兮反。軌、音月。」が入る。(校2) 處…十卷本はこの字を欠く。(校3) 關振子…十卷本「關鍵」に作る。(校4) 持身…十卷本「物身」に作る。(校5) 衡…十卷本はこの字を欠く。(校6) 格到…十卷本「較」に作る。(校7) 大者乎…十卷本「大事哉」に作る。

(1) 關振子 扉のとほそ。転じて、物事の關鍵となる部分。かなめ。『碧巖録』第一則・頌評唱「雪竇恐怕人逐情見、所以撥轉關振子」、『朱子語類』卷一〇「讀書、須是知貫通處、東邊西邊、都觸着這關振子

方得。只認下着頭去、莫要思前算後、自有至處」。

子曰く、人にして信無ければ、其の可を知らざるなり。大車輓無く、小車軌無ければ、其れ何を以て之を行らんや、と。

「信」は真心に基づいたもので、（人からの依頼を）引き受ける際に現れる。自身が世間と接する際の關鍵であり、まるで車に「輓」や「軌」があるようなものである。ところが世の人々はみな詐術を重んじ、「人にして信無く」、心と言葉が乖離し、ありとあらゆる手管を張り巡らせ、それに習熟すると、まるでそれがないとやっていけず、世のなかを渡ってゆけないと思っているかのようになる。ところが、絶対にやっつてはならないことがあることをまったく弁えていない。「可」か「不可」かは是非に照らして考えてみるだけでよい。「行る」か「行らず」の段階になって初めて、ことが利害に関係してくる。「人にして信無くんば」、どんな立場にいようと、「行る」ことを得ないのだ。小事ですらそうなのだから、ましてや大事であればなおさらだ。